

書 評

伊東さなえ、『ネパール大震災の民族誌—共同性と市民性が交わる場で災害に対応する』ナカニシヤ出版, 2024年, vii + 192 p.

前田昌弘*

本書は2015年4月25日のネパール大地震によって被災した村の再建をめぐる人々の対応を丹念に描き出したものである。本書が主なフィールドとする首都カトマンドウの南西にあるネワールの集落P村は、地縁・血縁や伝統的な祭礼等を通じて構築されてきた「村」と西洋近代的思想の流入や開発のなかで芽生えた市民社会を意味する「サムダヤー」が交錯する場である。そのような共同性と市民性が交わる震災の現場において、現地の人々は、国家や援助機関の介入のもと進んでいく復興支援をどのような論理のもと地域に取り込み、レジリエンシー（選択的回復力）を発揮しているのだろうか。

著者はかつて、ネパールでJICA青年海外協力隊として廃棄物対策プロジェクトに関わっていた。外部者として開発の実務に関わった経験は、本書においても復興支援をめぐる違和感の記述や人々の災害廃棄物（瓦礫）の扱いの分析等に活かされている。本書自体は復興プロセスの観察に即した震災の民族誌であり、著者は知人が主宰する地域復興プロジェクトの寄付者になったりもしている

が、復興支援や開発をめぐる何か直接的な問題提起や課題解決は目指してはいない。とはいえ、上述した著者の経歴・経験や震災後のコミットメントが、村をめぐる国際社会からの支援や多様なステークホルダーをめぐる複雑な力学に対する広い視野の確保ときめ細やかな記述を可能にしている。復興支援や開発の実務と距離を保ちながらも、復興において見過ごされがちな視点や固定化された現場の捉え方の問題性を鋭く指摘するなど、著者の実践感覚が本書全体に通底している。そのため、評者のような、防災や復興の実務的・実践的側面にどちらかというに関心をもつ人間にとっても本書は大変示唆的な内容を多分に含んでいた。

各章の内容を簡単にまとめ評者のコメントを添える。

第1章では震災前のP村において伝統的な「村」がどのように想像／創造され、また、どのようにして「サムダヤー」が生じていったのか検討している。そして、特に1960年代以降にP村が変容した要因として、①人口増加や家屋の更新に伴う村の境界の曖昧化、②国民国家の形成に伴う排他的な領域をもつ地方自治体の形成、および自治体と村の境界性のズレの発生、③開発による社会経済的カテゴリー（たとえば女性同士）やイシューに基づく新たなつながりの創出を挙げている。被災地の復興では、被害が激甚であるほど、災害後の状況への即時的対応に終始しがちである。それは被災して家族や住まいなど大切なものを失った当事者の感情を考慮すると無理もないことである。しかし、とも

* 京都大学大学院人間・環境学研究科

すると災害を機とした開発や改善の名のもとに外部から画一的な復興計画が押し付けられ、もとの地域の姿を一変させる状況を招きかねない。本章では震災前からのP村の変化を丁寧にたどっており、それは震災後の人々の対応や地域の変化を語るうえで重要な補助線となっている。

第2章では災害を契機に高揚した「私はネパール人」というナショナリズムについて検討している。そして、震災後のネパールでは、政府と被災者がそれぞれ抱く国際的支援への不信感に裏打ちされ、国家ナショナリズム的な言説と「被災したネパール人同士の助け合い」という市民社会的な言説が合流したことを明らかにしている。東日本大震災からの復興でも「絆」という合言葉とともにNPO等の支援者による地域の絆を活かした共助や住民同士の互助（助け合い）を称揚する風潮がにわかに広まった。そこでは被災地から離れた都市に住む人間が抱く村落共同体へのノスタルジーと中央主導の復興にとって都合の良い共同体像が想像／創造されていた。そして、地域コミュニティの問題解決力への過度な期待や負担の押し付け、共助・互助からこぼれ落ちる人々への配慮の欠如といった点が一部で批判された。ネパールの場合、多様な民族、言語、カーストが存在し、また、P村にみられるように国際的支援のネットワークが日常に組み込まれてきたという、日本の地方とは異なる社会背景があるなかで、震災を機にナショナリズムの高揚とともに人々の関係性がよりダイナミックな形で組み換えられ、そのなかでレジリエンシーが

発揮されていったのだと想像される。

第3章ではP村における住民による復興支援活動「サムダーヤ コ カーム」の詳細な描出を通じて、サムダーヤが単純に公共的なものを指すわけでも伝統的な村を指すわけでもなく「私たちの地域（ローカリティ）」という人々の感情の構造に立脚していることを明らかにしている。また、彼らの活動は、その活動主体および活動対象の境界が柔軟で曖昧であったからこそ開かれた包摂性を保ち得たのだということを指摘している。この柔軟かつ曖昧であるがゆえに包摂的であるという指摘は示唆的である。また、P村を実体としての地域そのものでもなく、かといって地域から完全に浮いたものでもなく、地域（ローカリティ）という次元からみつめようとする著者の視座が明示されている。そこで、柔軟かつ曖昧でありつつも共同体としての一定のまとまりを保ち得ているのはなぜか、という疑問を読者に抱かせ、第4章、第5章での共同体の儀礼の記述へと誘う橋渡しとなっている。

第4章では「牛の巡行」という祭りに着目し、祭りの開催はコムニタスのもつ再秩序化の力を用いて村の内側と外側、日常と非日常、人の世界と異界との境界を再構築するものであった点を明らかにしている。一方で、これはただ単に伝統的な村が再構築されたわけではなく、瓦礫の撤去にグローバルな友人たちのネットワークが用いられるなど、伝統的な村とサムダーヤ的なものが並列する地域（ローカリティ）のなかで祭りが実行されたと考察している。巡行はラーケー（魔物）の

登場や仮面行列、道化たちの様子とともに生き生きと描かれている。また、カラーの地図と写真で村の物理的境界（門）、「マト」と呼ばれる瓦礫の集積点、牛の巡行ルートの関係が示されている。特に、「マト」（ネパール語で土や泥）という呼称も含め、人々の瓦礫の取り扱いについての記述は興味深い。P 村では震災で倒壊した家屋の残渣も決して単なるゴミや不浄なものとは捉えられていなかったという。だとすると、倒壊しかけた家屋や瓦礫が山積みされ、一見すると村の復興が遅々として進んでいないようにみえる風景の意味も違ってみえてくる。それは、彼らの暮らしを構成してきたマトに人々が儀礼を通じて集合的に働きかけ、彼ら自身を再構成する瞬間を待つという、彼らの回復にとって欠かせない豊かな時間を象徴する光景であったといえるのではないかな。

第 5 章では、震災による死者が通常の生と死の連環のなかに位置づけられていく過程を震災直後の儀礼および震災から 3 年経過後の儀礼から明らかにしている。そして、震災による死者たちの死は非日常的で無秩序な「悪い死」ではなく、日常的で秩序のなかにある「良い死」とされ、それにより死者たちは地域（ローカリティ）に包含されたと述べている。この、震災の犠牲者への当事者の向き合い方という視座は、従来の工学を中心とする災害復興研究では完全に抜け落ちてきたものであろう。「被災者ひとりひとりを忘れない」「悲劇を二度と繰り返さない」といった一見まっとうだが紋切り型の文言が災害のたびに被災地で繰り返されるのはなぜか、復

興の名のもとに死者や残された者の尊厳がなおざりにされてはいないか。震災と死者〔北原 2021〕は、復興のあり方を問い直すうえで重要な視点であり、今後、分野越境的な研究へと展開することが期待される。

以上のように本書は、地域（ローカリティ）において市民性と共同性が媒介されたことで、震災復興におけるグローバルな市民社会ネットワークの資源の活用と、生の意味をもたらし「村」へのコミットメントが可能になったことを明らかにしている。著者が述べるように、そのことによる伝統的な「村」と外部の支援者たちという二分法を乗り越えた災害研究、および具体的な土地や神霊、人々の関係性の分析に立脚したコミュニティと市民社会の関係に関する研究に対する貢献を果たしている。

本書は、人と人以外の事物が混成するネットワークとしての社会、いわゆるポストヒューマニズムなどと呼ばれる現代の思想的潮流を踏まえたものであると思われるが、それについての本書の記述は控えめである。このことは理論的・抽象的な記述よりも、フィールドでの即地的な記述をより重視した結果であると思われ、本書の価値を貶めるものではない。むしろ具体的な記述を通じて理論の検証や他地域との比較が可能になると思われる。評者も、インド洋津波後のスリランカ南部沿岸集落の再定住の様態について研究してきたが〔前田 2016〕、そこで試みた、土地や人々の活動を媒介として発現するレジリエンスの分析は本書と響き合う点多々あり、興味深い。コミュニティ研究の嚆矢であ

るマッキーヴァーの多元的国家論〔マッキーヴァー 2009〕を持ち出すまでもなく、コミュニティは本来、この概念から通常考えられるよりも広い外延を有しており、特定の空間に収まるものではない。本書でも SNS 上の発信や関係者のやりとりの様子がたびたび紹介されているように、近年の情報技術・発信手段の拡張が、特定の空間に還元されないコミュニティ、本書でいうところの地域（ローカリティ）の成立可能性を飛躍的に高めている。近年の日本では都市でも地方でもコミュニティの衰退が顕著であり、高まる災害リスクへの悲観的なムードが漂っている。人や人以外の事物との積極的な情報交流、やりとりこそが、たとえ量的拡充がなくとも、また、災害で失われたものは元に戻らなくとも、人々の関係性を組み換え、暮らしの質と生の基盤を維持する鍵となる。このことは本書を通じて、震災後を生きるネパールの人々の生き生きとしたやりとりから学んだことである。

引 用 文 献

- 北原糸子. 2021. 『震災と死者—東日本大震災・関東大震災・濃尾地震』筑摩書房。
 前田昌弘. 2016. 『津波被災と再定住—コミュニティのレジリエンスを支える』京都大学学術出版会。
 マッキーヴァー, R. M. 2009. 『コミュニティ—社会学的研究：社会生活の性質と基本法則に関する一試論』中久郎・松本通晴監訳, ミネルヴァ書房。

内藤直樹・森 明子編. 『寄食という生き方—埒外の政治・経済の人類学』昭和堂, 2025 年, 412 p.

北嶋泰周*

本書は、国立民族学博物館共同研究「カネとチカラの民族誌」（代表：内藤直樹）で試みてきた議論を、『ケアが生まれる場』（森明子編, ナカニシヤ出版）の続編として展開させたものである。本書の主題である「寄食」とは、ギリシャ語の para-（横に）と sitos（食物）からなる「他人の傍らで食べる者」を原義とし、日本語では居候や食客、厄介者、英語では寄生を意味するパラサイトとして知られている。

本書の「はじめに」において森は、セールの『パラジット』を引きながら、寄食関係は状況と視点によって変化し、「主体と対象が一対一で対応するのではなく、一対多で対応する関係性が構想されている」（p. ii）と言及する。これは、ケアという関係性がケアする者からされる者へ単線的に向かうわけではないという見方を基盤にしていると同時に、主客の二元論に回収されない視座でもある。

また、序章において内藤は、寄食という言葉の依存的かつ片利的な側面は、自立性／自律性からなる市民社会のアンチテーゼとして位置づけられてきたと論じる。しかし、森がケアの関係性で論じたように、何かを寄食者だと否定的に捉える我々こそが別の何かの寄食者であり、諸アクターの利己的な行為に

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

よって我々が何かしらの恩恵を受けている可能性にも注意を向けるよう促す。

そうすると、我々がもつ「何が正しくて、何が誤りなのか」「何が善で、何が悪か」という市民社会のイデオロギーは宙吊りにされる。その混沌に満ちた“揺らぎ”こそが本書の狙いである。そこで内藤は、一般社会において脱制度的／非道徳的だと断罪される行為をむしろ肯定的に捉えることで、オルタナティブな社会創造の可能性を問おうとする。

この問いを検討するうえで、本書ではエコロジーという言葉や非人間との関係が論じられる。これは馴染みのない読者にとっては唐突だと感じるかもしれない。しかし、何千もの生物種による合意や理解を前提としない相互的な寄食関係という生態学的知見は、公共性をめぐるせめぎ合い（＝市民社会と埒外の存在が接近する場）にも適応可能であることを示唆している [cf. 内藤 2022: 133-135]。

このような議論は、文化人類学の分野でもマルチスピーシーズや存在論的転回として知られている。しかし本書がそれと異なるのは、その合意や理解が欠如する存在論的關係を倫理観や道徳性を相対化する視座として読み替えた点である。換言すれば、生態学的な複数種の相互関係に合意や理解が不要のように、到底容認できない他者であっても我々は「否応なく関係は既に構築されている」という現実から社会を捉えなおすことが可能だというのである。

本書の序章にて各章の内容が 14 ページにわたって詳細にまとめられているため、本稿では、本書におさめられた 18 におよぶ論考

をひとつずつ取り上げることはせず、第Ⅰ部から第Ⅳ部を簡単に紹介する。

第Ⅰ部「スキマを捉える」では、都市という人間によって創られた異種混淆なアクターからなる公共空間を舞台に、我々の生活のなかにさまざまな寄食者が既に埋め込まれている構造について論じられる。

第Ⅱ部「寄食がつくる経済」では、自己の生存上の必要や欲望の充足を目的とした「利己的な」あるいは「利他的に見えない」動機が、結果的に他者の支援やグローバルな社会課題の解決というヴァナキュラーな公共空間を創発していく過程について論じられる。

第Ⅲ部「公共空間のゆくえ」では、ランドスケープやインフラストラクチャーの議論を手がかりとした物質的な絡まりあいに着目し、国家政策や市場経済との関わりのなかで、種を越えた複数の他者とともに紡がれるポリフォニー的な公共空間の発生について論じられる。

第Ⅳ部「異種の出会い」では、人間と人間以上の存在との絡まりあいから、これまで〈不動の背景〉として客体化されてきた地球という「大地」が前景化する過程で、支援をめぐる物質主義的でオルタナティブな政治の可能性を探究する意義が示される。

本書は、第Ⅰ部で読者に「埒外な寄食者」の視点を獲得させつつ、第Ⅱ部～Ⅳ部にかけ、人間同士の関係から非人間を含む複数種の絡まりあいへと議論が緩やかに展開する。しかし本書を一読してから再び第Ⅰ部に戻ると、本文中には明示的に言及されていないものの、そこには非人間的な要素との関係が多

く散りばめられていることに気づくだろう。本書を読む際にはこの点に留意したい。それでは議論を進めていく。

80年代以降のフランス人類学では「遠い隔たったものから身近なものへ」と研究対象が変化した。その代表者であるマルク・オジェは、歴史・イマージュ・個の過剰により、歴史の加速性・空間の縮小化・準拠枠組みの個人化が進んだ現代社会をスーパーモダニティと呼んだ〔オジェ 2002, 2017〕。その結果、我々はイマージュを介してしか他者関係を構築できず、すぐ隣の人物とも常識を共有できているのか分からなくなった。

別稿において内藤は、文化相対主義を「エキゾチックで安全な『他者』の存在を許容するような現場というよりはむしろ、自分には受け入れがたいが関わらざるをえない『他者』とともに生きるやり方を探る現場にこそ必要とされる」〔内藤 2014: 4〕と述べる。オジェの議論にしたがえば、スーパーモダンな時代を生きる我々にとっての文化相対主義とは、遠く隔たった地域というよりも、すぐ隣の受け入れがたい文化的他者との間で実践される必要があり、それは本書における寄食者たちである。

ここで文化的他者との間での実践を「他者を理解して関係を構築する」ではなく「ともに生きるやり方を探る」と述べている点に注目したい。これは、小田〔2009〕が、現代人が非真正な社会と同時に〈顔〉の見える真正な社会を生きているという二重社会論を端緒として、他者了解の実践から自己と〈地続き〉な他者を見出す人類学の“本流”とも

呼べる議論〔関根 2001, 2010〕とは一線を画している。

本書でいえば、第3章（工藤）にて、南米チリにおける近代医療と先住民マプーチュの医療による診断が相反する場合に、「レスペード（敬意）」という言葉を紹介して理解放棄する点に表れている。この態度は、互いにとって都合の良い側面を利用しながら、医療の現場でともに生きるやり方を探る術として論じられている。

これに関連して、本書で批判的に検討される概念に古典的な西洋言説としての公共性がある。これはアレントやハーバーマスが論じてきた、生命の必要といった“私利私欲”に左右されない“市民”の熟議によって共生を図る営みである。この概念は、これまでも第二波フェミニズム運動のスローガン「個人的なことは政治的なこと」や、“市民”というカテゴリーの限定性に対する指摘〔フレイザー 1999〕によって批判されてきた。

これまでの人類学的営為は、このフェミニズム運動やフレイザーの批判に親和的であった—というより親和的であるべきとされた。なぜなら、人類学者は参与観察と他者理解、民族誌の作成に基づき、取るに足らないとされてきた者たちの声なき声をすくい上げ、それらを熟議の舞台に引き上げる役割があったからである。

しかし本書は、そのような言語中心主義的な信念を一度疑うことで、規範からはずれた人間や異種生物といった埒外存在による声なき行為を公共空間の内部から見出していく。つまり「言語」は生命の必要や思考を表

現する手段のひとつでしかなく、埒外（わが）の存在は一時には脱制度的／非道徳的なたちで一言語を介さない行為を通じ、我々に対して潜在的なコミュニケーションを既に図っているというのである。

この声なき行為によるコミュニケーションは、グリアスンの『沈黙交易』で明らかにされてきた市場や財の交換の萌芽に通じており〔cf. 内藤 2022: 132〕、その点は第 15 章（内藤）で、難民と地域住民の間で係争が発生してきたケニアのメガキャンプにおいて、平和的な場としての市場が形成されていく過程として描かれている。

また、第 1 章（三上）が示した、停電防止のために電柱の腕金を防ぐ都市計画は、建築物のスキマに住まうスズメを排除するようにみえる。しかし、この人間による円滑な都市生活に向けた行為は、スズメが人間に害獣として認識されない要因にもなり、都市風景のひとつとしてスズメを愛でるという良好な関係が発生している。

第 16 章（木村）では、岩手県における貝毒について「いつの日か、貝毒はホタテを人による大量殺害から救い、養殖による海の劣化を一時停止させたのだ—つまり人間が毒なのだ—と語られることがあるかもしれない」（p. 342）と結ぶ。これは、貝に経済的利益を見出す人間に対して、貝や異種生物が海や気温と自己のリズムを調和させ、人間側に変革を求めるコミュニケーションを図った可能性を示唆している。

スーパーモダンな時代に突入し、すぐ隣の人物と常識を共有できなくなったからこそ、

我々は身近な受け入れがたい他者との間で文化相対主義の実践に迫られている。しかし、他者理解が目的そのものではなく「ともに生きるための手段」であるのだとすれば、我々は理解とは異なるまた別の手段を採用し、それを実現する可能性を模索できるのではないだろうか。なぜなら、本書を通じて我々は、言語的コミュニケーションが図れない異種生物と既に「理解なき公共空間」を構築していると知っているからである。

本書は、社会的周辺の声なき声を公共の舞台へ引き上げる行為に内在する「人類学者の傲慢さ」を突きつけているのかもしれない。なぜなら、埒外（わが）の存在は人類学者が熟議の場に引き上げずとも、既に自ら声なき行為を通じて公共の場に現れている場合もあるからである。もちろん、第 3 章で言及されるレスパードという言葉を用いた理解放棄は、自文化中心的な相対主義〔浜本 1996〕に陥るという批判を受けるかもしれない。しかし本書は、理解の欠如ゆえに片方が割を食うような状況になったとしても、彼らは新たな理解なき共生の方途を探っていくのであらうと示しているのではないだろうか。

紙面の都合につき本稿で取り上げることができなかった事例および論点は枚挙にいとまがない。この点については、本書をインフラのひとつとしながら、読者がそれぞれの関心に結びつけて議論を展開していくことに期待したい。本書は「他者理解」を前提としてきた文化人類学の議論に一石を投じる示唆に富んだ議論を有し、各論者によって学問分野、対象地域、生物種間を横断する躍動的な事例

に満ちている。だからこそ、研究対象や地域を問わず文化人類学や地域研究を学ぶ全ての人の手に渡ってほしい一冊である。

引用文献

- オジェ, マルク. 2002. 『同時代世界の人類学』森山工訳, 藤原書店.
- . 2017. 『非-場所—スーパーモダニティの人類学に向けて』中川真知子訳, 水声社.
- 小田 亮. 2009. 「『二重社会』という視点とネオリベラリズム—生存のための日常的実践」『文化人類学』74(2): 272–292.
- 関根康正. 2001. 「他者を自分のように語れないか?—異文化理解から他者了解へ」杉島敬志編『人類学的実践の再構築』世界思想社, 322–354.
- . 2010. 「〈地続きの人類学〉から開ける

比較の展望—『浅い比較』から『深い比較』へ」出口顕・三尾稔編『人類学的比較再考』国立民族学博物館調査報告 90, 国立民族学博物館, 249–282.

- 内藤直樹. 2014. 「『社会的包摂／排除』現象への人類学的アプローチ」内藤直樹・山北輝祐編『社会的包摂／排除の人類学—開発・難民・福祉』昭和堂, pp. 1–13.
- . 2022. 「埒外の生態学にむけて—寄生と依存が生み出す社会」『思想』1182: 122–142.
- 浜本 満. 1996. 「差異のとらえかた—相対主義と普遍主義」『思想化される周辺世界』岩波講座文化人類学 第12巻, 岩波書店, 69–96.
- フレイザー, ナンシー. 1999. 「公共圏の再考—既存の民主主義の批判のために」クレイグ・キャルホーン編, 山本啓・新田滋訳『ハーバマスと公共圏』ポイエーシス叢書 41, 未来社, 117–159.